

マレーシアにおけるメディア統制と与党 UMNO の起源
—— 脱植民地期のマレー語ジャーナリズムと政治権力 ——

伊 賀 司*

**The Origins of Media Control and the United Malays
National Organization (UMNO) in Malaysia: Malay Journalism
and Political Power in the Decolonization Era**

IGA Tsukasa*

Abstract

This paper explores the relationship between journalism and political power in Malaya during the decolonization era, focusing in particular on the journalists and their networks of the Jawi-script Malay daily *Utusan Melayu* before the 1961 strike.

Utusan Melayu was launched in 1939 by the Singapore Malay Union to support the Malay community. Under the editorship of the two prominent journalists Abdul Samad Ismail and Yusof Ishak, *Utusan Melayu* mobilized the Malay people toward the independence movement. *Utusan Melayu* played a catalytic role in the establishment of the United Malays National Organization (UMNO) and allied with UMNO to fight against the British. This strategy on the part of the daily made a significant impact on the independence movement and at the same time gave the newspaper an exceptionally high reputation among the Malay public. However, after Malaya gained independence from the British, *Utusan Melayu* found itself confronted by UMNO. The confrontation culminated in UMNO's takeover of *Utusan Melayu* and later in the loss of the latter's editorial autonomy. The loss of the daily's editorial autonomy had a significant impact on the relationship between the media and political power after 1961.

The main question of this paper is why and how *Utusan Melayu* lost its editorial autonomy. To answer the question, this paper uses the memoirs and biographies of journalists as well as commemorative publications of the newspaper.

Keywords: Malaya (Malaysia), decolonization, nationalism, journalism, *Utusan Melayu*, United Malays National Organization (UMNO)

キーワード: マラヤ (マレーシア), 脱植民地化, ナショナリズム, ジャーナリズム, 『ウトゥサン・ムラユ』, 統一マレー人国民組織 (UMNO)

* 京都大学東南アジア地域研究研究所; Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University
e-mail: igatsukasa@gmail.com
DOI: 10.20495/tak.55.1_39

はじめに —— 脱植民地期のジャーナリズムと政治権力をめぐる問い

マレーシアのメディア史に大きな足跡を残したジャーナリストとして必ず名前が挙がるのが 2008 年に死去したアブドゥル・サマッド・イスマイル (Abdul Samad Ismail) である。その功績の大きさから「マレー語ジャーナリズムの父」ともいわれるサマッドは若干 16 歳でジャーナリズムの世界に入って以来、1946 年、1951 年、1976 年の 3 度の逮捕と投獄を経験しながらも常に第一線で活躍してきた。

サマッドは常にジャーナリズムの世界に軸足を置いて活動していたものの、その他の分野にも多大な影響を与えている。文学の世界では、自身で有名な文学作品を残しつつ、「社会のための文学」(Seni untuk Masyarakat) を唱えて後のマレーシアとシンガポールの文学界に多大な影響を与えた「1950 年文学者集団」(Angkatan Sastrawan 50: ASAS'50) の起ち上げに大きく貢献している。政治の世界では 1940 年代から 1950 年代にかけて植民地独立運動の活動家として活発に活動しただけでなく、独立後は主要な政治家の間でフィクサーの役割を果たしていたと見られている。

ジャーナリスト、文学者、独立運動活動家、政治的フィクサーと多様な顔を持つサマッドだが彼に最初の飛躍の場を与えたのがマレー語日刊紙の『ウトゥサン・ムラユ』(*Utusan Melayu*) である。後述するように、サマッドが編集部で中心的な役割を果たしていた 1940 年代から 1957 年のマラヤ独立までの『ウトゥサン・ムラユ』は、マレー・ナショナリズムの成立と発展に大きく貢献し、独立運動を主導したメディアであった。

現在のマレーシアにおいて『ウトゥサン・ムラユ』の輝かしいジャーナリズムの伝統を受け継ぐ新聞とみなされているのが『ウトゥサン・マレーシア』(*Utusan Malaysia*) である。1939 年に創刊された『ウトゥサン・ムラユ』はマレー語をアラビア文字で表したジャウィ (jawi) 文字を使って発行された。他方で、『ウトゥサン・ムラユ』の発行元のウトゥサン・グループが 1967 年に創刊した『ウトゥサン・マレーシア』は、創刊当初は『ウトゥサン・ムラユ』の内容をローマ字 (rumi) で発行した新聞だったが、その後は『ウトゥサン・マレーシア』の方がグループの主要日刊紙になっていった。¹⁾ 独立後のマレーシアのマレー語日刊紙業界は、『ウトゥサン・ムラユ』の伝統を受け継ぐ『ウトゥサン・マレーシア』と、1957 年に英語日刊紙『ストレーツ・タイムズ』(*Straits Times*) を発行するストレーツ・タイムズ・グループが創刊した『ブリタ・ハリアン』(*Berita Harian*) とによって長年市場が二分されて

1) 『ウトゥサン・ムラユ』は『ウトゥサン・マレーシア』が創刊された後も発行され続けたが、購読者の減少で 2003 年に日刊から週刊へ、2006 年 1 月には一時停刊した。しかし、停刊したその年のうちに政府の支援によって復刊することになった [Bernama 2006]。

きた。²⁾

マレーシアにおけるメディアと政治との関係について先行研究では新聞やテレビなどの主流メディアが政府・与党のプロパガンダの道具となっていることが指摘されてきた [Mustafa 2002; Zaharom 2002; Zaharom and Wang 2004]。総選挙時の新聞報道を詳細に分析したアボットが示しているように、『ウトゥサン・マレーシア』は他の新聞にもましてそうした傾向を強く帯びているといわれる [Abbott 2011]。その一方で、歴史に着目した研究では、『ウトゥサン・ムラユ』が1960年代初頭までは政治権力から独立し、政府・与党に厳しい批判を加えることも辞さなかったことを指摘している [Safar 1996; Latif 1998; Lily 2010]。

これらの先行研究の指摘からわかるように、同じウトゥサン・グループによる発行であるにもかかわらず、1960年代初頭までの『ウトゥサン・ムラユ』とその後継紙にあたる現在の『ウトゥサン・マレーシア』を比べてみれば、メディアの独立と政府・与党に対するスタンスをめぐって対照的な評価が存在している。過去と現在のウトゥサン・グループをめぐるとした対照的な評価は、マレーシアの第一線にいる（た）ジャーナリストやメディア関係者の間でも広く共有されている評価でもある。³⁾ したがって、この評価を踏まえて次に問われるべきは、このメディアの独立と政府・与党へのスタンスをめぐるとの違いがいつ、どのようにして生じたのかという点であろう。

マレーシアのジャーナリストやメディア関係者の間では、1961年に起こった『ウトゥサン・ムラユ』のストライキが転機となり、ウトゥサン・グループは統一マレー人国民組織 (United Malays National Organization: UMNO) に従属するようになったとの見方がある。ストライキはジャーナリストと労働者が団結して3カ月間続いた。メディア企業におけるこれほど長期のストライキはマレーシアの歴史では他に例をみないものである。しかし、このストライキは結局、経営側からの切り崩しで終焉していくことになる。ストライキ発生時のウトゥサン・グループの経営は新国家の与党として地歩を固めつつあったUMNOに握られていた。

マレーシアのメディア史において他に例を見ないこのストライキがなぜ起こったのかはいまだに議論となることがある。研究者やストライキに参加したジャーナリストの間では、政治的介入を強める与党UMNOに反発して編集の自由と独立を求めたジャーナリストがストライキを起こしたとする見方が一般的である。その一方で、ストライキに参加しなかったジャーナリストの一部からは、当時の『ウトゥサン・ムラユ』の編集部が共産主義のイデオロギーに影響

2) その後、1970年代になるとストレーツ・タイムズ・グループはマレーシアとシンガポールの2社に分社化され、マレーシアの方は英語日刊紙『ニュー・ストレーツ・タイムズ』(New Straits Times) を出版するNSTPグループとなった。マレーシアの『ブリタ・ハリアン』もNSTPグループから出版されている。

3) スティーブン・ガン (Steven Gan), ハッタ・ワハリ (Hatta Wahari), マスジャレザ・ハムザ (Masjaliza Hamzah) へのそれぞれ個別のインタビュー。

されており、ストライキは『ウトゥサン・ムラユ』の内と外の共産主義者によって扇動された結果起こったとする見方が示されることもある [Chamil 1989: 46-47]。

ストライキ発生の原因について、なぜメディアの自由および独立を求めたジャーナリストによる行動と共産主義のイデオロギーによる扇動という2つの異なる解釈が登場するのか。このストライキについて発生の原因のみならず、後世のマレーシアの政治とメディアに与えた影響も含めて正当に評価しようとするならば、『ウトゥサン・ムラユ』が創刊以来辿ってきた歴史を紐解く必要がある。さらに、このストライキをめぐる構図は1940年代から1960年代の脱植民地化の文脈と関連づけて捉えられることで、マレーシアに限定されない新興国の脱植民地化過程における現地語ジャーナリズムと政治権力の関係性をめぐる問題一般へと置き換えて理解することができる。

ベネディクト・アンダーソンが『想像の共同体』で指摘したようにナショナリズムの形成・発展に重要な役割を果たしたのは出版資本主義である。換言すれば、現地語で出版される新聞や雑誌などの印刷メディアの存在であった [Anderson 1983]。これを新興国の脱植民地期の文脈におけば、植民地主義への対抗と国民意識の創出という相互に関連する課題に立ち向かう必要のあったナショナリストにとって強力な同盟者となったのが、現地語の新聞や雑誌のジャーナリストであったことを意味する。あるいは、実態として独立や反植民地運動を戦うナショナリストが同時に現地語メディアで健筆をふるうジャーナリストや作家の役割を果たしていた例も少なくない。冒頭で紹介したサマッドはその典型例である。⁴⁾ 地域や時期、あるいは評価する研究者によって多様な見方があるにせよ、独立を求めるナショナリズムと現地語ジャーナリズムとが一体となって共通の敵である植民地権力に対抗しようとする姿は20世紀の脱植民地化過程にみられた歴史の一コマであろう。⁵⁾ 後述するように、1957年マラヤ独立までの『ウトゥサン・ムラユ』のジャーナリストと独立運動を担ったナショナリストもこの関係性の枠内にあったといえる。

しかし、現地語ジャーナリズムとナショナリズムとの関係が常に同じであるとは限らない。本稿で注目したいのは実際に独立が達成された後の両者の関係である。すなわち、独立運動に貢献した現地語ジャーナリズムは独立が達成された後には、植民地宗主国から権力を継承したナショナリスト政府といかなる関係性を築くのかという問いにも焦点が当てられる必要がある。そして、この問いこそが上述の1961年のストライキをめぐる議論に直接的に関わる。

4) マレーシア以外の国では、韓国では三一運動の独立宣言書を起草した崔南善、フィリピンでは歴史家としても著名なレナト・コンスタンティーノ (Renato Constantino)、植民地化はされていないもののタイでは文学作品でも有名なクラブ・サーイプラディット (Kulap Saipradit) などの名前を挙げることができる。

5) ナショナリズムとジャーナリズムの結合の一例として、植民地統治下の朝鮮半島における「民族紙」を対象とする李 [2006] の研究を参照。

本稿の議論を先走りして言えば、1961年のストライキとは、独立運動の中で権威を確立した現地語ジャーナリズムと植民地宗主国から権力を引き継いだ現地人の政治権力が対立関係に陥り、最終的には破局に至った事態とみなすことができる。そうだとするならば、なぜ、どのような過程を経てこの破局に至ったのか。換言すれば、脱植民地化の過程⁶⁾でイギリスから UMNO へとその主を変えていった政治権力と、それと時を同じくして成立していったマレー語ジャーナリズムとの関係はどのような形で始まり、そして変化していくことになったのか。

本稿で明らかにしようとするのはこれらの問いである。これらの問いに答えるために、本稿は独立や UMNO 結成といった国政レベルに関わる政治過程と、ジャーナリズムが生成される現場の双方の視点を行き来しながら議論を展開する。ジャーナリズム生成の現場を描写するにあたっては、『ウトゥサン・ムラユ』を作り上げてきた主要なジャーナリストの言動と人脈に着目する。その際の基本資料となるのはジャーナリストたちの回想録や伝記、ウトゥサン・グループが節目の年に発行した記念出版物である。⁷⁾ 主に回想録と伝記に基づき、本稿が依拠する資料と重なる資料を利用した研究については、リリーの研究がある [Lily 2010]。しかし、この研究は回想録や伝記の当事者たちをナショナリズムの担い手あるいは知識人の立場から分析するものであり、脱植民地期のジャーナリズムと政治権力の関係性に着目して分析しようとする本稿とは焦点が異なっている。

本稿と同様にジャーナリズムと政治権力というテーマを中心に据えつつ、脱植民地化期のマレー語新聞を分析対象に含む研究としてモハド・サファールとアブドゥル・ラティフの研究がある [Safar 1996; Latif 1998]。しかし、前者の研究は新聞と政治権力との関係性を 1806 年から 20 世紀後半までの長期の歴史の中で追跡した研究であるため、結果として脱植民地化期の議論は散漫なものとなっている。後者の研究は主に『ウトゥサン・ムラユ』が 1959 年と

6) 本稿で脱植民地化の過程を議論するにあたって問題になるのはその時期であろう。脱植民地化の時期については国によって違いがあり一概には決められない。本稿ではとりあえず、マラヤ（マレーシア）の脱植民地化の時期をマレー人社会の中での植民地主義と既存の政治・社会構造への批判の高まりが表面化しつつあった 1930 年代から、1957 年のマラヤ独立を経て、1965 年のシンガポール離脱で現在のマレーシアが成立するまでであると定める。

7) 本稿で使用するジャーナリストの回想録は、サイド・ザハリ、サマッド・イスマイル、アジズ・イシャクによるものである。ザハリについては 3 冊の回想録が出版されているが、このうち本稿の議論に直接関連するのは 2001 年に出版された最初の回想録である [Zahari 2001; 2006; 2015]。サマッドについては文学作品や新聞に寄せた記事を集めた著作も多いが、本稿の議論に直接関連する回顧録は 1993 年出版のものである [Samad 1993]。また、サマッドと同時代に『ウトゥサン・ムラユ』に勤務していたり親しい関係にあった人が彼の誕生日を記念して出版した本も参照した [Cheah 2000]。アジズについては 1977 年に出版された回想録がある [Aziz 1977]。他にもユソフ・イシャクについて、シンガポールのナショナル・アーカイブの協力のもと、インタビューを活用してチュウが書いた伝記を参照している [Chew 1999]。ウトゥサン・グループの記念出版物については、10 周年、40 周年、50 周年のものを参照したが、本稿が主に利用したのは 50 周年の出版物である [Utusan Melayu 1949; 1979; 1989]。

1964 年の総選挙で果たした役割に重心があるため、ジャーナリスト個人に注目してジャーナリズム生成の現場をみる本稿とはアプローチが異なる。

脱植民地期マラヤを舞台とする研究の中には、歴史学の立場から本稿の議論に関連があるマレー・ナショナリズムの視点を通じてアプローチする研究が既に多数存在する [Firdaus 1985; Ramlah 2004; Sani 2008; Ariffin 2015; Syed 2015]。しかし、本稿はこれらの研究とは一線を画す。これらの研究は後述するマレー・ナショナリズム内部の左派と右派とのイデオロギーの違いやその実態に関心を寄せる。本稿の議論にとって左右のマレー・ナショナリズムの違いやその実態は重要ではあるが中心テーマではない。本稿は政治学およびメディア研究からの分析であり、繰り返しになるが、脱植民地期マラヤに現れた現地語ジャーナリズムと政治権力の関係性が中心テーマである。

本稿の構成は以下のとおりである。第 I 章では、後の著名なジャーナリストたちを生んだ『ウトゥサン・ムラユ』が当時のどのような環境の下で創刊されたのかをみていく。第 II 章では、戦後のマラヤ独立までの期間中に『ウトゥサン・ムラユ』の編集部の中心にあったサマツドに焦点を当て、彼がどのようなイデオロギーや人脈の影響下でジャーナリズム活動を行っていたのかをみていく。第 III 章では、マラヤ独立期における『ウトゥサン・ムラユ』と独立運動を主導した UMNO との関係性をみるとともに、この当時の『ウトゥサン・ムラユ』にみられたジャーナリズムの特徴について明らかにする。第 IV 章では、独立を目前にして『ウトゥサン・ムラユ』とイギリスから権力を継承しつつあった UMNO との関係が変質しつつあったこと、そして、その変質が 1961 年のストライキにつながっていったことをみる。最後に本稿のまとめを行う。

I 『ウトゥサン・ムラユ』の創刊 —— 第二次大戦前のマレー語紙業界

1. 第二次大戦前のマレー語紙業界

イギリス植民地統治下マラヤで最初のマレー語新聞とされるのが、シンガポールで 1876 年に創刊された週刊の『ジャウイ・プラナカン』(Jawi Peranakan) である。新聞の名前になっているジャウイ・プラナカンとは、マレー半島で生まれたムスリムのコミュニティの名称でもあり、そのコミュニティは主に南インドから商業目的で 18 世紀末から 19 世紀にやってきた人々とマレー人女性との間にできた子孫たちから構成されていた [Roff 1994: 48]。

『ジャウイ・プラナカン』の発行部数は約 250 部でその多くがシンガポールの植民地政府によって買われて、現地の学校へと配布された。『ジャウイ・プラナカン』の読者は主にマレー半島で生まれたアラブ人やマレー人などであったが、彼らは非常に少数のエリート集団であった。それは、当時のシンガポールでは少なくとも 4 分の 3 のマレー人は読み書きができず、イ

ギリスの下でシンガポールとともに海峡植民地を形成していたペナンやマラッカでも同様な識字率の状況があったためである [Marina 1972: 18]。また、『ジャウィ・プラナカン』創刊後もマレー語の新聞や雑誌の創刊は続いたが、ニュースの内容は英語新聞からの翻訳が多く、紙面の内容も植民地政府の意向に沿ったもので占められていた。

19世紀後半から始まったマレー語出版の内容、担い手や読者に大きな変化が観察できるようになるのは1930年代に入ってからのものである。1930年代には81のマレー語定期刊行物が出版された。これは1920年から1930年の10年間に新たに出版されたマレー語出版物の数が34であったことと比較すると2倍以上の伸びである。マレー語刊行物の出版はイギリスの植民地統治下でいち早く都市化が進んだシンガポールやペナンを拠点にして始まり、1930年代に入ると出版物の刊行地はマレー半島の全域に広がっていった [Roff 1994: 162, 166]。⁸⁾

1930年代に入るとマレー語紙上にはマレー人の民族的覚醒や経済・社会的後進性の改善を訴えるマレー・ナショナリズムの言説が紙上で活発に展開されるようになった。1930年代のマレー・ナショナリズムの主な舞台となったのは、1930年創刊の『ワルタ・マラヤ』 (*Warta Malaya*)、1931年創刊の『マジリス』 (*Majilis*)、1935年創刊の『ルンバガ』 (*Lembaga*)、1939年創刊の『ウトゥサン・ムラユ』の4紙であった。これらのマレー語紙のジャーナリストの中から第二次大戦中から戦後にかけてのマレー・ナショナリズムを代表する活動家が生まれた。

代表的な人物として、オン・ジャアファル (Onn Jaafar)、イブラヒム・ヤコブ (Ibrahim Haji Yacob)、アフマド・ブスタマム (Ahmad Boestamam)、サマッドの名を挙げることができる。UMNO創設者であるオン・ジャアファルは『ワルタ・マラヤ』と『ルンバガ』の編集者として生涯のキャリアを積み重ねた。反植民地主義とイギリスからの独立を掲げる青年マレー人連盟 (Kesatuan Melayu Mudah: KMM) を結成したイブラヒム・ヤコブは、教師として活動する傍らでマレー語紙に活発な投稿を重ね、KMM結成後には教職から離れて『マジリス』の編集者として活動した。KMMの系譜を引く人民党 (Parti Rakyat, 後のParti Rakyat Malaysia) を戦後に結成したアフマド・ブスタマムは、イブラヒム・ヤコブの下で『マジリス』のスタッフとして働いていた。後述するサマッドは戦中から戦後の『ウトゥサン・ムラユ』の言論を主導し、重要な政治的場面ではフィクサーの役割も果たした。

彼らの戦中から戦後の活躍が示すように、戦前のマラヤのマレー・ナショナリズムの発展の軌跡は草創期のジャーナリズムのそれと重なる形で進んでいった。戦前のマレー語紙はマレー・ナショナリズムの担い手たちを生み育てる、いわば保育器の役割を果たしていたのであ

8) 1930年代のマレー語出版物の刊行地は、コタバル、クアラピラ、シンガポール、クバラバタス、ムアル、クアラランプール、ペナン、バトゥパハツ、クアラトレンガス、マラッカ、クアラカンサー、ジョホールバル、イポー、スレンバンの14都市にわたっていた [Roff 1994: 166]。

る。

1930年代のマレー・ジャーナリズムの活性化は19世紀末以降の読者層の拡大にも支えられていた。1930年代のマレー語紙の読者層をめぐる状況について以下のような観察がなされている。

言うまでもなく、町ではこれらの新聞は全てのマレー語書店で常に入手可能であり、そのうちの幾つかは様々なマレー人クラブでも手に入れることができ、自動車のドライバーでさえも読んでいた。カンボン [村] の農民たちもまた、マラヤの他の地域や世界のことに関して「スラッ・カバール」[新聞] が何を語っているか大きな興味を抱いていることが見てとれる。しばしば夕方には、華人商店の道端で読み書きのできる男——それはおそらく地元の学校の年老いた「グル」[教師] であるか、はたまた地元の村長であるか——がこれらの新聞のいずれかを読んでおり、文字の読めない年老いた人々の小さな一団が、彼の周りで熱心に耳を傾け、質問をし、意見を出している光景を見ることができた。それゆえ彼らは世界の他の地域で起こっていることを学び、マレー語の諺がいう「椰子ガラ碗の下の蛙」[井の中の蛙] の状態からますます脱却しつつある。[Zainal-Abidin 1941: 249]

植民地政府のセンサスでは1931年にマレー人男性の識字率は48.3%に達していた。⁹⁾ ロフは、この数字には注意が必要だとしながらも、1920年代半ばには都市部ではマレー人の識字率が向上し、農村部においても教職に就いたり、マレー語学校および宗教学校に通ったりするマレー人がますますマレー語の書籍や新聞に接するようになったと指摘している [Roff 1994: 84]。

以上のような1930年代のマレー語紙の内容、担い手や読者の変化のうねりの中で『ウトゥサン・ムラユ』は1939年に創刊されることになる。

2. 『ウトゥサン・ムラユ』創刊

『ウトゥサン・ムラユ』はシンガポール・マレー人連盟 (Kesatuan Melayu Singapura: KMS) の1938年の決議に基づき、翌年の5月29日に創刊された。マレー人の地位向上を目指して設立されたKMSが問題にしたのは、マレー人と同じムスリムでも経済的に豊かなアラブ系やインド系の人々からマレー人の独立したリーダーシップをいかにして確保するかと

9) ロフが引用したセンサスでは、クランタンとトレンガヌの識字率が8%と7.9%であるのに対し、クアラランプールでは62.8%と地域ごとに大きな差が見られる [Roff 1994: 84]。

いう点であった。中でもマレー語新聞の所有権の問題は、紙面の内容とともに KMS の人々が取り組むべき重要な課題とみなされていた。

最初のマレー語紙である『ジャウィ・プラナカン』を所有していたのはその新聞名のとおり、インド系ムスリムであった。また、シンガポールで 1930 年に創刊された『ワルタ・マラヤ』もアラブ人の裕福な一族であるアルサゴフ (Alsagof) 家が所有する新聞であった。1907 年創刊の『ウトゥサン・ムラユ』¹⁰⁾ は、シンガポールで発行された最初の英語紙『シンガポール・フリー・プレス』(*Singapore Free Press*) のマレー語版として創刊された。『ルンバガ・ムラユ』(*Lembaga Melayu*) も英語紙『マラヤ・トリビューン』(*Malaya Tribune*) が出版したマレー語版の新聞として始まった。1907 年創刊の『ウトゥサン・ムラユ』と、『ルンバガ・ムラユ』の双方とも母体となった英語紙の記事のマレー語訳から始まり、都市に住む進歩的なマレー人の声を反映する新聞として発展していったが、その内容は植民地政府がとる政策や立場から逸脱しない範囲でマレー人の経済・社会的地位の向上を図ろうとする穏健なものであった [Roff 1994: 160-161]。

以上のように 1930 年代に至るまでシンガポールで出版されてきたマレー語紙はその所有権がアラブ系やインド系のムスリムに握られているか、欧米人が所有する英語紙のマレー語版として始められたもので占められていた。そこで、KMS はマレー人が所有する、マレー人のための新聞の創刊を目指したのである。

KMS から『ウトゥサン・ムラユ』創刊の仕事を託されたのは、後にシンガポール共和国初代大統領を務めることになるユソフ・イシャク (Yosof Ishak) である。ユソフは当時のイギリスの保護国であったマレー連合州 (Federated Malay States) ペラのタイピンで 1911 年に生まれた。ラッフルズ学院 (Raffles Institution) での教育を終えた後、マレー連合州の警官となり、その後、短期で英語雑誌の『スポーツマン』(*Sportsman*) の刊行に関わった。失敗に終わるものの、ダイヤモンドの商売も手掛けた。1932 年には『ワルタ・マラヤ』の経営に携わって頭角を現した [Chew 1999: 70-71]。

KMS が『ウトゥサン・ムラユ』を創刊しようとした時に問題となったのは資本金である。『ウトゥサン・ムラユ』は 2,000 ドルを支払って最初の会社登録を終えたが、規定を満たすためにはさらに 1 万 500 ドルを 3 カ月以内に集める必要があった。そこで、KMS の指導者やユソフが手分けしてマレー半島の各地をめぐり、マレー人自身による日刊紙の必要性を説くことで、幅広い層から資金を集めようとした。ユソフはシンガポール周辺の 30 以上の村を訪れ、5,000 人を超える人々に会ったという。また、シンガポールだけでなく、ジョホール南部、クアラルンプール、パハンやマレー半島東海岸などでも資金集めが行われた結果、400 人近くの

10) 1939 年創刊の『ウトゥサン・ムラユ』と同名だが異なる新聞であることに注意。

マレー人が『ウトゥサン・ムラユ』の株式を購入し、新しいマレー語紙の創刊を支えた。株式の購入者の多くはタクシー運転手、屋台の店主、小農などからなり、彼らが1株1ドルで少ない蓄えの中から株式を購入したのである。しかし、400人近くからの資金提供によっても、依然として8,000ドル以上が不足したために、最終的にKMS指導者のダウド・モハマド・シャー (Daud Mohd. Shah) とエンボック・スロ (Embok Suloh) の個人的な出資で『ウトゥサン・ムラユ』はようやく創刊することができた [Roff 1994: 175-176; Chew 1999: 73]。

KMSがマレー半島の各地で様々な階層の人々から出資を募ろうとしたのは、新たに創刊する『ウトゥサン・ムラユ』に対して一部地域のエリートに限定されないマラヤ全域のマレー人を包括する「エスニック・メディア」としての役割が期待されていたからにほかならない。先行研究における「エスニック・メディア」の定義としては、当該社会の中で「マイノリティ」の民族とみなされる人々によってその文化や帰属意識の維持・向上を目指して用いられるメディアであるとの定義が一般的である。¹¹⁾ 1930年代のマラヤではマレー人は人口的には多数派を占めていたものの、これまで指摘してきたように、政治的にはイギリスの植民地体制に組み込まれ、経済的にはアラブ系やインド系のムスリムたちよりも劣位な状態にあり、さらに民族的な一体感や覚醒についても依然として萌芽的な段階にあった。そこで、KMSを組織していたマレー人エリートたちは、マラヤの社会の中で「マイノリティ」的地位に置かれたマレー人コミュニティのアイデンティティ確立と経済・社会的地位の向上を支援する「エスニック・メディア」として『ウトゥサン・ムラユ』を創刊したのであった。そうした創刊者たちの期待は、『ウトゥサン・ムラユ』が「民族」(Bangsa)、「宗教」(Agama)、「故郷」(Watan)の3つを掲げてマレー人コミュニティに貢献することを誓ったことにも表れていた。

『ウトゥサン・ムラユ』創刊後の最初の月の発行部数は1,000部だったが、後に700部から600部にまで部数を落とさざるをえなくなり、追加の借入を実施するなど一時的に苦しい経営が続いた。しかし、ユソフの勧誘で『ワルタ・マラヤ』の著名なジャーナリストであったアブドゥル・ラヒム・カジャイ (Abdul Rahim Kajai)¹²⁾ を編集長に迎え入れた後は、マレー人コミュニティからの大きな支持を得て、1939年末には1,000部に回復し、1941年までには1,800部に到達して経営は安定することになった [Roff 1994: 177]。

11) 例えば、エスニック・メディアについて町村は「人間の空間移動によって生み出された人種民族的マイノリティが自前の言葉を求めて作り出すメディア」であると定義している [町村 1994: 417]。一方で、白水は「当該国家内に居住するエスニック・マイノリティの人びとによってそのエスニシティのゆえに用いられる、出版・放送・インターネット等の情報媒体である」と定義している [白水 2004: 23]。

12) アブドゥル・ラヒム・カジャイは戦前のマレー語出版の発展において大きな貢献をしており、30年代には『サウダラ』(Saudara)、『マジリス』、『ワルタ・マラヤ』といったマレー語紙でのジャーナリズム活動を経て、『ウトゥサン・ムラユ』の編集に携わるようになった。戦前のラヒム・カジャイのジャーナリズム活動とマレー語紙の動向についてはLatif [1984: 8-82]を参照。

第二次大戦前の『ウトゥサン・ムラユ』はマレー人の地位向上を求める言説を展開したが、イギリスの植民地支配や封建的性格を強く残していたスルタン制の問題に対しては明確な見解を表明することを避け、「注意深く、臆病なほど」であった [ibid.: 176]。以下の社説は当時の『ウトゥサン・ムラユ』の政治的立場をよく示している。

イギリス政府は公正な政府である。イギリスは長期にわたりマレー人とマレー国家を守ってきた。イギリス政府でなければ、マレー人は一体どこに問題を持ち込むべきなのだろう。 [Utusan Melayu 19 June 1939]

第二次大戦前には現状の植民地統治の枠組みの下でマレー人の地位向上を目指そうとした『ウトゥサン・ムラユ』だったが、日本の占領期を経てマラヤ独立期に入るとその言論は大きく変化することになる。

II サマッド・イスマイルの台頭

日本軍の侵攻で 1942 年にシンガポールを含むマラヤ全域が占領されると、『ウトゥサン・ムラユ』は『ブリタ・マライ』 (*Berita Malai*) と改名され、日本のプロパガンダ紙として軍政に協力することになる。この『ブリタ・マライ』の時代に頭角を現し、1950 年代のマラヤ独立期に『ウトゥサン・ムラユ』の編集部を事実上率いて言論をリードしたのがアブドゥル・サマッド・イスマイルである。

サマッドは 1925 年 4 月 24 日にシンガポールのカンボン・ムラユで生まれた。¹³⁾ 祖先はジャワの出自で祖父の代に一族はシンガポールに移ってきた。サマッドの幼少期には父親はマレー人学校の校長を務めてマレー人コミュニティから敬意を集めていた。シニア・ケンブリッジ (Senior Cambridge) 試験¹⁴⁾に合格した後、若干 16 歳でサマッドは『ウトゥサン・ムラユ』に入社して働き始めた。入社当初は、ユソフ・イシャクに記者になりたいか編集者になりたいかを問われたものの、本人はその違いも実はよくわからなかったという [Samad 1993: 41]。

日本軍がシンガポールを占領し、『ウトゥサン・ムラユ』が『ブリタ・マライ』へと変え

13) サマッドの公式の出生証明では 1924 年 4 月 18 日生まれになっており、一般に新聞記事等で引用される場合は 1924 年生まれとされることもある。しかし、サマッド本人によれば実際は 1925 年 4 月 24 日生まれである。サマッドによれば、若年でシニア・ケンブリッジ試験を合格したサマッドを当時の人々は信じないと父親が考え、出生記録を 1 年ほど改定したために、実際の年齢より 1 年前の出生証明が残されたという [Samad 1993: 23]。

14) 現在のマレーシアでは、大学および高等教育機関への入学証明となる STPM (Sijil Tinggi Persekolahan Malaysia) に相当する。

られた時、編集を担当していたのはラヒム・カジャイやイシャク・ムハマド (Ishak Muhammad)¹⁵⁾ といった戦前から知られたジャーナリストたちであった。彼らは、『ブリタ・マライ』がスタートした当初は、マラヤの独立を日本が支援してくれると考えて軍政にも協力的立場をとった。しかし、後に日本がマレー人を利用するだけであると悟ると『ブリタ・マライ』から相次いで去っていくことになった。主要な編集者が去っていく中で後に残されたのは若干20歳になるかならないかのサマッドであり、1944年末から1945年にかけて彼が編集を一手に引き受けて『ブリタ・マライ』は発行されることになる。

戦時中の『ブリタ・マライ』には、イブラヒム・ヤコブ、ブルハヌッディン・アルヘルミ (Burhanuddin al-Helmi),¹⁶⁾ アフマド・ブスタマムといった活動家が出入りしていた。彼らは急進派あるいは左派のマレー・ナショナリストと呼ばれる。これらの左派活動家は人脈的には戦前のKMMの系譜を引く活動家で構成され、戦後はマラヤ・マレー国民党 (Parti Kebangsaan Melayu Malaya: PKMM) を中心に結集することになった。左派活動家に分類される人物の間にも見解の相違が存在し、同じ人物でも時期によって違いがあるともいわれる。しかし、彼らの間には一定の共通する主張やイデオロギーが存在した。

その共通性とは、強い反英・反植民地主義、即時の独立要求、独立にあたってオランダ領東インド、イギリス領マラヤ、およびボルネオを糾合して独立を目指す「大インドネシア構想」(Indonesia Raya あるいは Melayu Raya) の推進、スルタン制に代表される伝統的政治・社会構造への幻滅、非マレー人も含めたムラユ概念の採用などからなる。他方で左派に対して、戦後に結成されたUMNOに集まったマレー・ナショナリストたちは保守派あるいは右派と呼ばれる。右派の方は親英かつ独立には慎重で戦前の秩序回復を第一に考えることからスルタンに代表される伝統的政治・社会構造と親和的である、といった特徴が指摘される [Firdaus 1985: 73; Ramlah 2004; 山本 2006: 53-55; 左右田 2006: 49; Sani 2008; Ariffin 2015: 45-47; Syed 2015]。

冒頭で述べたように左右のマレー・ナショナリズムは本稿の中心的テーマではない。本稿にとって重要なのは、青年期のサマッドが左派マレー・ナショナリズムに連なる人脈の影響下で思想を形成したことであり、そのことが後述するように『ウトゥサン・ムラユ』をして現地人の政治組織として組織されるUMNOとは同様のナショナリズム運動の担い手でありながら、

15) パック・サコ (Pak Sako) の愛称で知られたイシャク・ムハマドは『ワルタ・マラヤ』のジャーナリストだった時に『ウトゥサン・ムラユ』設立に必要な資金集めのためにマレー半島東海岸を回っている。その後、『ウトゥサン・ムラユ』に移り、ラヒム・カジャイの後をついで『ブリタ・マライ』で編集を担当した。また、イブラヒム・ヤコブらとともにKMMの結成やその後の左派マレー・ナショナリズムの発展に大きな貢献をした。

16) ブルハヌッディン・アルヘルミは第二次大戦後に、PKMMの設立者の1人に名を連ね、PKMMが解党した後は、野党の全マラヤ (マレーシア) ・イスラーム党 (Parti Islam Se-Malaysia: PAS) を率いることになる。

時には異なる見解に基づいて UMNO に対して批判することを可能ならしめた点である。

サマッドは左派マレー・ナショナリストの間で指導的な立場にあったイブラヒム・ヤコブ¹⁷⁾との戦時中の関係を以下のように回想している。

私はその時、依然として忠実なイブラヒム・ヤコブの追随者の1人であって、クリス (Kesatuan Rakyat Istimewa: KERIS あるいは KRIS) 運動¹⁸⁾のために新たな幹部を探し出すのを助け、ほぼ毎日、国内外の発展についてブリーフィングをした。つまり、私はイブラヒム・ヤコブの「トラブル・シューター」だったのだ。[Samad 1993: 204]

終戦によってイギリスがマラヤに戻ってくると、サマッドは日本軍への戦争協力の罪で逮捕され、投獄されることになる。サマッドは、1951年にもマラヤ共産党系組織の反英同盟 (Anti-British League) への関与を疑われて投獄されている。この2度の逮捕の時期を除き、サマッドは1940年代半ばから1950年代における編集部の中心人物として『ウトゥサン・ムラユ』の言論をリードしていった。

終戦後の『ウトゥサン・ムラユ』では、戦時中に死亡したラヒム・カジャイに代わって創刊時から社長を務めるユソフ・イシャクが編集長を兼務するようになっていた。編集と経営の両面から社内で絶対的な地位に就いたユソフは卓越した経営手腕で『ウトゥサン・ムラユ』を戦後のマレー語紙業界において他に並ぶものがない地位に押し上げた。1945年9月に復刊した『ウトゥサン・ムラユ』は、翌年2月までには1日当たり6,000部の発行部数にまで拡大している [Utusan Melayu 1949: 20-23; Chew 1999: 77]。さらに、1957年までにはシンガポール以外のマレー半島での売り上げを伸ばすことで、発行部数は4万部にまで拡大した [Chew 1999: 77]。また、独立期には読者数は発行部数の約5倍程度はあったとも推計されており、『ウトゥサン・ムラユ』はマレー人社会に非常に大きな影響力を持つ新聞へと成長したのである [Ainon 1974: 40]。

経営と編集の双方でトップの地位にあったユソフに対して、社内で唯一わたりあうことができたのが編集部で副編集長¹⁹⁾の地位にいたサマッドだった。『ウトゥサン・ムラユ』の記者で

17) 他にもサマッドの青年期の思想形成に重要な影響を与えた人物として『ウトゥサン・ムラユ』における彼の上司たちを挙げることができる。サマッド自身は常日頃、ラヒム・カジャイに下品なジョークを、ユソフ・イシャクからは難しいスタッフを扱う際の規律と決断力を持った強い精神を、イシャク・ムハマドからは人生一般についてより多くを学んだと言っていたという [Hamidah 2000: 38]。

18) クリス運動は日本軍政下でインドネシアとの統合によるマラヤ独立を目指す組織としてイブラヒム・ヤコブらによって1945年7月に結成された。クリス運動の詳細については長井 [1978: 79-82] を参照。

19) 当時の記者の1人が記憶するところでは、当時、『ウトゥサン・ムラユ』の編集部内では、サマッ

もあったサマッドの妻のハミダ・ハッサン (Hamidah Hassan) は 2 人の関係を「双子」のような関係であったと回想している [Hamidah 2000: 25]。当時の記者の回想では、毎日、『ウトゥサン・ムラユ』の社説と内容を決定したのはユソフだが、スタッフたちが耳を傾ける中で、編集方針を議論したのはサマッドであった。また、ユソフは時には自身で社説を書くこともあったが、マレー語より英語の方が流暢だったために、ユソフが英語で社説を書き、サマッドがそれを翻訳していたという [Chew 1999: 85]。

『ウトゥサン・ムラユ』の「事実上の編集長」としての地位にあったサマッドは社外にも幅広いネットワークと交友関係を持ち、学生、政治家、活動家などが頻繁に彼を訪れていた。ハミダは次のように回想している。

彼 [サマッド] はもちろん『ウトゥサン・ムラユ』の「ラジャ」でした。故ユソフ・イシャクが『ウトゥサン・ムラユ』の編集長でしたが、A. サマッド・イスマイルは「事実上の」編集長として編集部内を統括していたのです。来客はユソフに会ためではなく、A. サマッド・イスマイルと何かを相談するか、彼と知り合うためにウトゥサンへやって来たのです。政治的指導者や政治家は A. サマッド・イスマイルと問題を議論するためにウトゥサンにやって来ました。学生たちはサマッド・イスマイルに助言を求め [やって来ました]。[Hamidah 2000: 37]

政治家については、サマッドが設立発起人の 1 人として名を連ねるシンガポールの人民行動党 (People's Action Party: PAP) が結成されると、リー・クアンユー (Lee Kuan Yew), S. ラジャラトナム (Sinnathamby Rajaratnam), デヴァン・ナイル (Devan Nair Chengara Veetil) ら PAP 指導者たちがサマッドと相談するため頻繁に『ウトゥサン・ムラユ』を訪れるようになったという [Usmang 2000: 50; Ali 2000: 82]。

『ウトゥサン・ムラユ』とそれを事実上率いるサマッドの影響力は、反英独立運動の主体であった華人系学生団体や労働組合にも浸透していた。マレーシア人民党 (Parti Rakyat Malaysia) 総裁や人民公正党 (Parti Keadilan Rakyat: PKR) 副総裁を歴任したサイド・フシン・アリ (Syed Husin Ali) は、1955 年に当時シンガポールにあったマラヤ大学に入学している。彼によれば、当時の大学生と『ウトゥサン・ムラユ』のジャーナリストは非常に密接な関係にあり、大学に入学したばかりの学生はまずは『ウトゥサン・ムラユ』の記者と会い、お互いを知り合うことが伝統となっていたという [Syed Hussin 2000: 76]。また、1950 年代に華人

ドがどのような公式な地位についていたか実際は誰もわかっていなかったという。ただし、サマッドが編集部ではユソフに次ぐ地位にあり、編集部を統括する立場にあることは誰もが認めていたという [Ali 2000: 88]。

学生のデモでバリケードが張られた際、華語紙の記者でも通行が許されなかったが、『ウトゥサン・ムラユ』の記者はサマッドの指示で取材をしていると言うだけで通してもらえたという。労働組合の場合でもサマッドの名前を出すだけで取材がスムーズにできたというエピソードもある [Ali 2000: 90-91]。

さらに、サマッドの交友関係はシンガポールだけに留まらなかった。1940年代後半には、サマッドはインドネシアの独立戦争にも深く関わっていた。サマッドのインドネシアとの関係は、彼の家系がジャワの出自であったことに加え、日本軍政期の『ブリタ・マライ』の時代にインドネシアのナショナリストと活発に交流したことで、より深いものになっていた。終戦後、インドネシアが独立戦争を始めるとシンガポールはインドネシア独立運動の闘士たちが資金や武器を調達するための基地となった [Firdaus 1985: 113]。サマッドの住む集落は独立闘争の闘士たちを収容する拠点の1つであった。サマッドは彼らを支援し、シンガポールからインドネシアに向けての武器や食料の密輸に関わっていたとされる [Cheah 2000: 3]。サマッド本人が認めるように、『ウトゥサン・ムラユ』には共産主義者、タン・マラカ (Tan Malaka) の一派、イスラーム主義者など様々な勢力を代表するインドネシア独立運動の闘士が来訪し、シンガポールの政治団体と接触する場所ともなっていたのである [Samad 1993: 208]。

では次に、サマッドの率いた『ウトゥサン・ムラユ』がマラヤ独立期に果たした政治的役割について見ていくことにしよう。

III 独立までの『ウトゥサン・ムラユ』と UMNO の関係

1. UMNO の誕生と『ウトゥサン・ムラユ』

第二次大戦後にマラヤに戻ってきたイギリスは、新しい統治の仕組みとして1945年10月にマラヤ連合 (Malayan Union) 案を提示し、1946年4月にシンガポールを除くマレー半島の11州によってマラヤ連合が正式に発足した。しかし、このマラヤ連合に対しては計画段階からマレー人の間では大きな反発が巻き起こっていた。マレー人によるマラヤ連合への批判は次の2点に集約される。第一に、スルタンの政治・行政上の権限を大幅に縮小して宗教面だけに限定することで、戦前の間接統治からイギリスの直接統治へと体制を変更する点である。第二に、19世紀以降、本格的にマラヤに移り住んできた華人やインド人等の非マレー人に対し有利な形で市民権を付与する点である。²⁰⁾ 中でも市民権の問題は、移民の非マレー人と比較して

20) マラヤ連合案では、1946年の法令発行時にマラヤ連合かシンガポールに住んでいた18歳以上の者で、1942年2月15日以前の15年間のうち、10年以上居住していた者に自動的に市民権を与えるとともに、帰化を通じて、申請に先立つ8年間のうち4年以上マラヤ連合かシンガポール内に在住し、マレー語か英語の知識のある者も市民権を付与されることになっていた。この市民権をめぐる

経済的に劣位な立場にあると考えるマレー人にとって受け入れ難いものだった。

『ウトゥサン・ムラユ』はマラヤ連合案が発表された直後から他のマレー語新聞に先駆けてマラヤ連合に反対する論陣を張った。1945年10月16日の社説はマラヤ連合案に対し次のような言葉でマレー人社会における反対の機運を盛り上げようとした。

この瞬間、我々の将来は危険にさらされている。新しい計画は我々や我々の孫にまで影響することになり、大きな疑問符が付く。もし、我々が消極的で怠惰であれば、孫たちは我々を呪うことになるだろう。[*Utusan Melayu* 16 October 1945]

この『ウトゥサン・ムラユ』の反マラヤ連合の論説に続いて『ワルタ・ヌガラ』(*Warta Negara*)や『マジリス』といったマレー語紙も次々とマラヤ連合に反対を表明した。さらに、1945年1月頃のマレー語紙上では、戦前に各州に作られたマレー人連合組織を糾合して、反マラヤ連合の統一組織を結成しようとする議論が盛り上がるようになった。マレーシアの将来を決定づける重要局面において、『ウトゥサン・ムラユ』は言論活動によってアイデアを提示し、コミュニティの動員を図るという決定的な役割を果たしていたのである。

マレー語紙の議論を受けて、戦前からマレー・ナショナリストとして名が知られていたオン・ジャアファルが『マジリス』紙上で反マラヤ連合の統一組織結成をアピールすることになった。このオン・ジャアファルの呼びかけに答えて、1946年3月に全マラヤから41団体、約300人のマレー人団体の代表が集まってクアラルンプールで反マラヤ連合の会議が開かれた。この会議の席上、マレー人団体の代表を前にした演説でオン・ジャアファルは『マジリス』と『ウトゥサン・ムラユ』の提案がUMNOの結成へと結実したことを認めた[Mohammad 1961: 57]。3月の会議を受けて、5月にジョホールバルで新たな会議が催され、そこで反マラヤ連合の統一連合組織としてのUMNOが正式に発足することとなった[Funston 1980: 76]。

UMNO構成団体の中には、左派マレー・ナショナリストが主導するPKMMの参加もあった。しかし、PKMMは2カ月でUMNOを脱退し、その後はUMNOとの対立を深めていくことになる。PKMMの離脱は反英によって一瞬は大同団結したかにみえたマレー・ナショナリズム運動内部でわだかまっていたイデオロギーや独立運動の進め方に関する亀裂がUMNOとその対抗勢力のPKMMという形をとって本格化した瞬間であったといえるだろう。

UMNO結成とその後の抗議活動によって、マラヤ連合への反発が予想以上に大きいことに驚いたイギリスは、マレー人との間で妥協を探り始めることになる。イギリスは、マラヤ連合を見直して新憲法を發布するための憲法作業委員会を1946年8月に発足させてマレー人を含

議論の変遷の詳細については、金子 [2001: 105-114] を参照。

めた協議を開始した。この作業委員会でのマラヤ側代表としてイギリスが交渉相手に選んだのは、スルタンと UMNO の代表であり、新体制に向けての議論は非公開とされた。作業委員会での検討の結果、12月24日にマラヤ連邦 (Federation of Malaya) の憲法案が発表された。²¹⁾

イギリスのマラヤ連邦案発表後の『ウトゥサン・ムラユ』は、反英的立場を堅持しつつ、即時独立ではなくイギリスとの時間をかけた交渉を選択した UMNO に対しても時には厳しい批判の矛先を向けることになった。

UMNO とイギリスは、マラヤ連邦がマラヤに真の民主主義をもたらさないために、マラヤ連邦を望んでいるのだ。UMNO が独立国家で権力を握るための身づくろいをしながら、彼らは現状維持とイギリスの帝国利益の守護を企てているのである。[*Utusan Melayu* 27 October 1947]

この時期の『ウトゥサン・ムラユ』による UMNO 批判の厳しさに UMNO 総裁のオン・ジャアファルは次のように漏らしたといわれる。

『ウトゥサン・ムラユ』は非常に明らかな反 UMNO の姿勢をとっているので、私にとってそのコラムに見るべきところは全くない。[Stockwell 1979: 43]

研究者の中には1947年から1948年にかけて『ウトゥサン・ムラユ』が UMNO のライバル政党になりつつあった左派系政党の PKMM を支持していたとみる者もいる [Funston 1980: 40]。当時の『ウトゥサン・ムラユ』が PKMM 支持の新聞とまでいえるかは別にして、とりあえずここでは『ウトゥサン・ムラユ』がマラヤ独立期の政治過程において、時には UMNO よりも急進的な主張を掲げて独立の方向性に積極的に影響を与えようとしていたことを確認しておきたい。

しかし、『ウトゥサン・ムラユ』の批判は大きな影響を与えないまま、マラヤ連邦は当初の予定通り1948年に発足することになった。そこで『ウトゥサン・ムラユ』は、マラヤ連邦発足が UMNO の勝利を意味しないとし、次のように注文をつけることになった。

UMNO はその勝利が最終的なものではないことを理解すべきだ。真の意味での勝利とは、UMNO が一般の人民の生活面で [の改善に] 明白な証拠を [示すことを] もって、政治

21) 作業委員会に参加したのは6名のイギリス政府代表、4名のスルタン代表と、2名の UMNO 代表だけであった [Firdaus 1985: 87-88]。

面で左派を打ち負かしたならば勝利と言えるのである。これからは、UMNO は人民の生活を改善するための確固たるプログラムを持つべきである。これこそが UMNO 指導者に対する真の試練である。[*Utusan Melayu* 6 February 1948]

2. 自由な編集部

1940 年代後半にはその親英的な立場と即時独立を求めない姿勢などによって『ウトゥサン・ムラユ』から批判を受けることになった UMNO だったが 1950 年代に入るとその活動方針の一部が左派マレー・ナショナリストの主張に近づいていった。それを如実に表すのが、UMNO のスローガンの変化である。結成当初の UMNO のスローガンは「マレー人よ永遠なれ」(Hidup Melayu) であった。このスローガンの採用には、UMNO を主導したスルタンらを中心とする旧支配層が即時独立ではなく、戦前の植民地統治下での旧秩序の回復を志向していたことが影響していた。しかし、1950 年 8 月の UMNO 党大会を境に、スローガンを「独立」(Merdeka) に変更することが提案され始める。1950 年 8 月の党大会を引きつぐ形で翌年 3 月の党大会で青年部による提案を経て、「独立」が正式なスローガンとして採用されることになった [Firdaus 1985: 127-128]。

その後の UMNO は創設者オン・ジャアファルの UMNO からの離党とトゥンク・アブドゥル・ラーマン (Tunku Abdul Rahman) の第 2 代総裁選出を経てマラヤ独立運動の最大の受け皿として成長していった。さらに、1955 年の自治政府の議員を選ぶ初の総選挙で UMNO を中心とする 3 党の政党連合である連盟 (Alliance) が圧勝²²⁾したことで、独立後の政府は UMNO 主導で構成されることが決定づけられた。

この頃の『ウトゥサン・ムラユ』の編集部の中には政治権力はもとより、宗教や特定のタブーからも自由な立場で議論ができる雰囲気があふれていた。サマッドは 1950 年代の『ウトゥサン・ムラユ』を次のように回想している。

『ウトゥサン・ムラユ』の編集部内では、マルクス主義、宗教からセックスに関する疑問も持ち出されて、編集部員の間で話されるトピックには何の制限もなかった。1950 年代の『ウトゥサン・ムラユ』の編集部内にはタブーはなかった。英語表現で言われるような、「神聖なる牛」[聖域] は『ウトゥサン・ムラユ』にはなかったのである。[Samad 1993: 186]

22) 連盟は UMNO と、華人政党のマラヤ華人協会 (Malaya Chinese Association: MCA) および、マラヤインド人会議 (Malayan Indian Congress: MIC) の 3 党によって選挙に臨み、全 52 議席中の 51 議席を獲得して圧勝した。

当時の自由な編集部の雰囲気を反映して、『ウトゥサン・ムラユ』は植民地政府からの圧力に対しても引き下がらずに抵抗を示していた。『ウトゥサン・ムラユ』の抵抗ぶりを示すエピソードとして、1953年のエリザベス女王戴冠11周年を祝う式典の記事をめぐるものがある。この記事を書いたのは後述する『ウトゥサン・ムラユ』のジャーナリストで当時のクアラルンプール支社を統括していたアジズ・イシャク (Aziz Ishak) である。アジズの記事に不満を覚えた当時のマラヤ高等弁務官のジェラルド・テンプレー (Gerald Templar) はアジズを呼びつけて恫喝し、「鼠」と侮辱した。アジズはクアラルンプールの支社でテンプレーの恫喝と侮辱をそのまま記事にして、シンガポールにいるサマッドに送った。記事を受け取ったサマッドは、さらに『シンガポール・スタンダード』 (Singapore Standard) 編集者に連絡し、アジズの記事を掲載してもらうように頼んだ。翌日の朝刊では、『シンガポール・スタンダード』と『ウトゥサン・ムラユ』の双方の新聞で「鼠ジャーナリスト」 (Rat Journalist; Wartawan Tikus) の大きなヘッドラインが並ぶことになった。面目を潰された形となったイギリスはこの事件後、『ウトゥサン・ムラユ』のジャーナリストに対する態度を改めざるを得なくなったという [Zahari 2001: 52-53; Jeniri 2005: 12]。

3. ジャーナリストの「二重機能」

植民地権力にも屈せず言論を展開していた『ウトゥサン・ムラユ』であったが、徐々に近づいていく独立を前にして新たな権力者が生まれることを見越した、したたかで現実的な対応も行っている。『ウトゥサン・ムラユ』がとったのは、独立という大目標を前に、UMNOと協力関係を結ぶことで共通の敵イギリスと闘うスタンスであった。

この『ウトゥサン・ムラユ』の当時のスタンスを体現していた人物がアジズ・イシャクであった。アジズは『ウトゥサン・ムラユ』社長のユソフ・イシャクの弟で、戦前は植民地政府の公務員でありながら、KMMのメンバーであった。戦後は兄の招きで『ウトゥサン・ムラユ』に入社してジャーナリストとして活躍し、後には同社の取締役にも就任した一方で、政治活動にも深く関わった。

1946年にはサマッドとともに青年運動隊 (Gerakan Angkatan Muda: GERAM) を結成している。GERAMの結成は、アジズによれば、「UMNOが[独立について]あまりにゆっくりしすぎている一方で、MNP [PKMMの英語表記]がインドネシア独立の要求のテンポに調子を合わせすぎている」ために、「GERAMはその中間になろうとした」という [Aziz 1977: 6-7]。しかし、GERAMは植民地政府によって結社登録を拒否され、アジズが1948年に『ウトゥサン・ムラユ』のクアラルンプール支局長となってシンガポールを離れたこともあり、自然消滅した。1950年にはUMNOに入党したが、翌年にオン・ジャアファルがUMNOを離党し、マラヤ独立党 (Independence of Malaya Party: IMP) を結党するとそれに従い、UMNO

を離脱した。1953年にはオン・ジャアファルとの見解の違いからIMPを離党し、UMNOに再入党している。UMNO再入党後は主要な党リーダーの1人として活躍し、1955年にはスランゴールUMNO代表として独立前の自治政府の下で実施された選挙に出馬し当選する。議員となって『ウトゥサン・ムラユ』を退社した後は、同年に組織されたラーマン内閣で農業大臣となっている。²³⁾

以上のアジズの経歴からは、この当時のジャーナリズムと政治活動が不可分の関係にあったことがわかる。アジズと同様にジャーナリズムと政治の双方に深く関わったサマッドは、自らの経験も踏まえてジャーナリストが政治家の機能を兼ねることをジャーナリストの「二重機能」(dwi-fungsi)と呼んでいる [Samad 1989: 64]。独立期の『ウトゥサン・ムラユ』はUMNOの政治家となって政治にも軸足を置く「二重機能」のジャーナリストを一定数抱えていた。²⁴⁾ サマッド本人が政治家を務めるという意味で直接的に政治に関わったわけではない。しかし、サマッドの研究を行ったあるジャーナリストは、こうした「二重機能」のジャーナリストや専業の政治家はもちろん、学校の教師や村の役人なども含む無数のネットワークを通じてサマッドが情報を収集するとともに、彼らをエージェントとして利用して働きかけを行うことで政治的影響力を行使したことを指摘している [Ahmad 2000: 128-133]。このように当時からジャーナリストでありながら隠然たる政治的影響力を持つとみなされたサマッドが、後述するようにラーマンやリー・クアンユーなどの政治指導者の警戒感をかきたてたのも仕方のないことであったのかもしれない。

IV 独立後の『ウトゥサン・ムラユ』 —— UMNO との関係の変化

1. サマッドとユソフの退社

1957年8月にマラヤはイギリスからの独立を果たした。独立前の『ウトゥサン・ムラユ』とUMNOとの関係は、『ウトゥサン・ムラユ』が時にはUMNOを厳しく批判することがあったものの、独立の達成という共通目標のために協力しあう共闘関係にあったとみることができる。しかし、独立が現実の日程として迫ってくる中で『ウトゥサン・ムラユ』とUMNOの対

-
- 23) その後のアジズは閣内でラーマンと対立して1963年に大臣を辞任し、UMNOから除名される。同年、インドネシアがマレーシアとの「対決政策」(Konfrontasi)を進める中でアジズはインドネシアに味方するマレーシアの裏切り者として国内治安法で逮捕され、1965年まで投獄された。
- 24) アジズの他にもUMNO政治家との「二重機能」を果たしていた『ウトゥサン・ムラユ』のジャーナリストとして、UMNOシンガポール支部の婦人部長であったサマッドの妻のハミダ、スレンバン支局長の後にスグリシンビラン州のUMNO青年部長となったサマッド・イドリス (Samad Idris)、クアラリピスの記者でパハン州UMNOの指導者だったカイルディン・カウイ (Khairuddin Kawi)、UMNOの党員でありながら『ウトゥサン・ムラユ』だけでなく、英語紙『ストレーツ・タイムズ』の記者でもあったダハリ・アリ (Dahari Ali) などがいる [Samad 1989: 64]。

立が表面化していくことになる。独立前後の『ウトゥサン・ムラユ』を含むメディアと与党との関係についてアジズは次のように回想している。

全体的に見て、プレスに関する自由については、私と故人となった兄 [のユソフ・イシャク] は独立前には論説欄の自由がずっと大きかったとの考えで一致していた。『ウトゥサン・ムラユ』は政策を立案することで連盟と協力するだけでなく、イギリスによる国土と人々、特にマレー人の搾取に対する攻撃の先頭に立った。しかし、独立を達成すると、連盟の指導者たちは『ウトゥサン・ムラユ』による公平なコメントや批判に寛容さを失い、後にはプレス一般に対してもそうなった。[Aziz 1977: 19]

独立の前後で UMNO が『ウトゥサン・ムラユ』への態度を変えていった理由の1つとして当時の読者層の急速な変化を指摘できる。都市部のシンガポールで創刊された『ウトゥサン・ムラユ』だったが、マレー半島で急速に部数を拡大し、1950年代後半には読者の8割が農村部のマレー人で占められるようになっていた [Safar 1996: 258]。UMNO は自らの支持基盤であるマレー人に非常に大きな影響力を持つ『ウトゥサン・ムラユ』に介入して統制下に置く機会を狙っていたのである。UMNO による『ウトゥサン・ムラユ』への介入の機会は同紙が事業拡大を目指そうとするときにめぐってきた。

マラヤ独立を前に『ウトゥサン・ムラユ』は創業の地のシンガポールから新国家の首都になるクアラルンプールへ本社を移転することで、今後の読者層の拡大が望まれるマレー半島部への浸透を図ろうとした。この時に起こったのが、サマッドをめぐる不可解な人事異動である。独立の年の1957年に、サマッドは急遽、社長兼編集長の地位にあるユソフからインドネシアのジャカルタ勤務を命ぜられてマラヤから離れた。本社で編集部を事実上統括していた立場から他国の支局に左遷される形となったサマッドは、特に明確な任務は与えられず、宗教の記事を書くことを命じられたという [Samad 1989: 64]。『ウトゥサン・ムラユ』のスタッフの間では、事実上の編集長であるサマッドの急なジャカルタへの異動をユソフらの経営陣に撤回させようとする声も少なくなかった [Zahari 2001: 84]。しかし、サマッド本人が目立った抵抗をみせずにジャカルタ勤務を受け入れたために問題が表面化しないままとなった。

マラヤ独立直前の不可解なサマッドのジャカルタ派遣がなぜ行われたかについて、現在でも確定した見方はないものの、当時のサマッドが『ウトゥサン・ムラユ』内外で発揮していた影響力を恐れた3人が関わっているとの見方がある。

1人目は新国家マラヤの首班となることが決まっていたラーマンおよび彼周辺の UMNO 指導者である。彼らが『ウトゥサン・ムラユ』と結合した形でのサマッドの政治的影響力の大きさを懸念して、マラヤでの新聞の免許停止を材料にすることで『ウトゥサン・ムラユ』に圧力

をかけ、サマッドを編集部から追い出そうとしたとの説である [Samad 1989: 64]。

植民地統治下のマラヤでは共産党のゲリラ活動に対抗するために 1948 年に非常事態令が発令されたが、同じ年に成立したのが出版物発行に免許申請を義務づける出版機法 (Printing Presses Ordinance) であった。出版機法は 1984 年になると出版機・印刷物法に法改正されるが、現在の政府・与党が印刷メディアに政治的介入を行う際の主要な手段となっている。UMNO はイギリス統治下で導入されたメディア統制の手段をそのまま受け継いだのである。

ラーマンは国内統治の観点からだけでなく、個人的にも共産主義やそれに近い左派のイデオロギーを非常に毛嫌いしていたことで知られている。第 1 の見方は左派マレー・ナショナリストの人脈ネットワークの中にあり、「二重機能」のジャーナリストとして政治的に大きな影響力を持つと見られていたサマッドが『ウトゥサン・ムラユ』の本社移転とともにクアラルンプールに来るのをラーマンらは阻止しようとしたとみるのである。²⁵⁾

とはいえ、サマッドを本社移転予定のクアラルンプールに異動させなくとも、創業の地で依然として重要な拠点であるシンガポールに残しておくという選択肢は十分あり得たはずである。

サマッドの不可解な異動に関して、『ウトゥサン・ムラユ』の法律アドバイザーの地位にあり、ユソフにも影響力を及ぼすことができたリー・クアンユーの意向が働いていたことを示唆しているのはサイド・ザハリ (Said Zahari) である [Zahari 2001: 86; 101]。ザハリはサマッドやユソフが『ウトゥサン・ムラユ』を去った後の編集部を率いて、1961 年のストライキのリーダーとなった人物である。

1950 年にケンブリッジ大学での法律の勉強を終えてイギリスから帰国したリーは、反英独立運動を行う活動家の弁護を次々と引き受けてその名前を知られていくことになる。リーがマレー人コミュニティや『ウトゥサン・ムラユ』と関わるきっかけになったのが、シンガポールのムスリムが欧米人・キリスト教に対して感情を爆発させ暴動につながった 1950 年のマリア・ヘルトフ (Maria Hertogh) 事件である。²⁶⁾ リーはこの事件の弁護をユソフ・イシャクの仲介で担当した。1951 年には生涯 2 度目の逮捕・投獄を経験したサマッドの弁護を担当したことで『ウトゥサン・ムラユ』とのつながりを深めていった。これが縁となって 1954 年にはサマッドらと PAP を結成している。

リーは学生時代からイデオロギー的に共産主義とは一線を画していたが、PAP の結成当初は共産主義と親和的な左派勢力を党内に取り込んで共闘せざるをえなかった。それは、リーを

25) サマッドは当時親しかったラーマン側近のサイド・ジャーファル・アルバル (Syed Jaafar Albar) と連絡を取り、UMNO 内部の様子を探ろうとしている。ジャーファル・アルバルはサマッドのジャカルタ行きが UMNO 内部の権力争いに端を発していることを示唆し、ユソフの決定に抵抗するように勧める手紙をサマッドに送っている [Samad 1989: 64-65]。

26) マリア・ヘルトフ事件の詳細については、Syed [2009] を参照。

中心とするイギリスの大学出のエリート・グループはシンガポール社会の中で少数派であり、政治的影響力を拡大するうえで学生組織や労働組合からなる大衆組織に基盤を置く左派勢力に依拠せざるをえなかったからである [岩崎 1996: 54-55]。ザハリは、リーは一説には共産主義者であるとも言われているサマッドの個人的背景を承知していたが、PAP 設立当初はサマッドと彼のネットワークを利用し、左派勢力との暗闘が始まりつつあった独立直前にサマッドを切り捨てたとみている [Zahari 2001: 103]。

独立直前にラーマンやリーといった政治家による圧力が強まっていた一方で、サマッドのジャカルタ勤務を最終的に決断したのはサマッドの唯一の上司であるユソフ・イシャクである。ユソフはラーマンやリーとは異なる観点からサマッドを持って余すようになりつつあったとの見方がある。ハミダは、サマッドの『ウトゥサン・ムラユ』でのキャリアの暗転の原因として、事実上の編集長として『ウトゥサン・ムラユ』で大きな影響力をふるっていたサマッドの存在が、ユソフの感情を刺激した点を重視する。

私はおそらく、このこと [サマッドが実質の編集長として君臨したこと] がユソフと A. サマッド・イスマイルとの関係に徐々に亀裂を生じせしめ、それが最終的に顕著になって 1957 年に彼らの関係が破綻することにつながった理由の 1 つだと思います。意識してか無意識にかはわかりませんが、A. サマッド・イスマイルはナンバーワンの男としてボスに影を投げかけ始めていたのです。そして、最後には、A. サマッド・イスマイルはユソフを影の立場に追いやった対価を払わなければならなかったのです。彼らの間には気質や価値観に違いもありました。[経営者の立場にあった] ユソフと違って、A. サマッド・イスマイルはほとんど完全に労働者と近い心情にあったのです。 [Hamidah 2000: 37]

ユソフの気質に関するエピソードを彼の弟のラヒム・イシャク (Rahim Ishak) は次のように語っている。

[[『ウトゥサン・ムラユ』を始める前の] ダイヤモンドの商売が失敗し、彼が短期間、水道の仕事に就いていたのを覚えている。彼は遠い場所にある木造の宿舎に住んでおり、私は週末彼を訪ねた。この生活は長く続かなかった。彼は自分の生涯でその時のことを思い出すのを嫌っていた。おそらく、他人の下では働かないことを強く心に決めていたからだろう。彼はイギリス人の下で働いたことがあった。彼は決してそれを好まなかったのだ。時には私たちは両親と同じテーブルを囲んでそのことについて話したが、そんな時には彼はその場から立ち去っていた。彼はその当時のことを思い出すのを好まなかった。そんな男がユソフ・イシャクだ。彼は常にナンバーワンにならねばならないと考えていた。

[Chew 1999: 71]

ユソフは部下に対して厳格な規律を求めて些細なミスに対してもすぐに怒りを爆発させるため社内で非常に恐れられ、植字工や印刷工からは「虎」(Harimau) と呼ばれるほどだった [Othman 1989: 55; Samad 1993: 110-113; Ali 2000: 88]。そんな中で、サマッドは「ユソフの予想不可能な気分を常に和らげるバッファーの役割を果たしていた」 [Ali 2000: 92]。こうした気質や価値観の異なるユソフとサマッドが協力して作り出す紙面が『ウトゥサン・ムラユ』のこれまでの成功を生み出してきたが、サマッドのジャカルタ勤務によって2人の関係には亀裂が走った。

サマッドはユソフの命に従いジャカルタへと下っていったが、1年もたたずにシンガポールに無断で戻り、そのまま『ウトゥサン・ムラユ』を退社し、英語日刊紙『ストレーツ・タイムズ』に入った。その後はクアラルンプールに移り、ストレーツ・タイムズ・グループから1957年のマラヤ独立を機に発行された『プリタ・ハリアン』の編集者となる。サマッドは創刊当初は『ストレーツ・タイムズ』のマレー語翻訳版にすぎないとみられていた『プリタ・ハリアン』を独自の新聞として作り上げていくのに精力を傾けることになる。

サマッドが去った後の『ウトゥサン・ムラユ』でユソフは政府・与党からの圧力を1人で受け続けることになった。クアラルンプールへの本社移転後、ラーマンはユソフを頻繁に公邸へと呼び出し、『ウトゥサン・ムラユ』が野党寄りで偏向し、政府を非難しすぎているとして圧力をかけ始めるようになる。ユソフは連日のラーマンとの会談で繰り返し加えられる圧力に疲れ果て、次第に消耗していった。ある日、編集者のザハリは次のような衝撃的な光景を目にしている。²⁷⁾

ある朝、トゥンク [ラーマン] との「朝食」会談を終えて『ウトゥサン・ムラユ』に着くや否やユソフ・イシャクは自分の部屋に私を呼び出した。ユソフは疲れ果て問題を抱え込んだ顔つきをしていた。私が向かいの椅子に座った瞬間、彼は切り出した。「私はこれ以上耐えられない、サイド。もうたください。私の長いジャーナリストとしてのキャリアの中でもこれほど辱められたことはない。イギリスの植民地主義者にだってこんな目にあわされたことはない。本当にもうたください」。[中略] 彼はもはや自分の感情をコントロールできなかった。私の目で恥も忘れて咽び泣いた。両手で顔を覆って心の底から泣き叫んだのだ。[Zahari 2001: 59]

27) この衝撃的な光景については、筆者とのインタビューでもザハリが強調していた点である。

編集部はサマッドが『ウトゥサン・ムラユ』を去った後も、外部からの干渉を排して独立を維持しようとした。しかし、強まり続ける UMNO からの圧力と編集部との間で板挟みになったユソフは自身と兄弟、一族が持つ『ウトゥサン・ムラユ』の株式をラーマンに全て売却し、創刊以来情熱を傾けてきた『ウトゥサン・ムラユ』を 1959 年に離れることになった。

2. UMNO による買収からストライキへ

サマッドとユソフというマラヤ独立期の『ウトゥサン・ムラユ』を支えた 2 大巨頭が退社するという事件が起こっていた舞台裏で、着実に進んでいたのが UMNO による『ウトゥサン・ムラユ』の株式買収である。

既に述べたように、ウトゥサン・グループはマラヤ独立に商機を見出して本社機能のシンガポールからクアラルンプールへの移転を決定した。そこで必要になったのが新たな社屋と印刷機を購入するための事業資金である。その資金集めのために 1956 年には、1939 年の設立以来 2 度目となる新株の発行を行った。この時の新株発行によって『ウトゥサン・ムラユ』の最大の株主になったのは、スプランプライに本拠を置いてマレー半島北部で輸送業を営むフェデラル・トランスポート (Federal Transport) 社であった。この会社のトップはペナン島の UMNO 指導者のハシム・アワン (Hashim Awang) だった。しかし、彼が『ウトゥサン・ムラユ』に対する UMNO の立場を直接的に代弁するようになったのではなく、彼の会社からジョホールの企業家を経て、最終的に UMNO へと株式が渡ったとされる。フェデラル・トランスポート社から UMNO に至る株式の売買は 1958 年から 1961 年までの間に行われたという [Safar 1996: 254-255; Latif 1998: 274]。

1950 年代末のユソフ・イシャクの退社や株式の買収を通じて UMNO は『ウトゥサン・ムラユ』の経営を把握していったが、編集部員や記者たちは依然として政府・与党から独立したメディアを維持しようとした。この時、編集部を率いたのは本稿冒頭で紹介したザハリであった。彼の下で『ウトゥサン・ムラユ』は外交面では、コンゴ動乱やイリアンジャ紛争に対して反植民地主義の論陣を張り、西欧や植民地宗主国寄りの立場にあるとみられたラーマン政権を厳しく批判している。²⁸⁾ 国内政策ではハミド・トゥア (Hamid Tuah) に率いられた土地なし農民の運動を『ウトゥサン・ムラユ』が支持していたことが UMNO との対立に拍車をかけた。²⁹⁾

28) ザハリへのインタビュー [2009 年 8 月 1 日スパンにて]。アブドゥラ・アフマドは、ラーマン政権下の外交政策はケンブリッジで教育を受け、親イギリス的な思想を持つラーマンの個性が強く反映されたものであったとする。ほとんどの外交上の決定は閣議を通してではなく、非常に限られたサークルの中でのラーマンと親しい人間との接触から決定されるパターンができていたのである [Abdullah Ahmad 1985: 1-3]。

29) ザハリへのインタビュー [2009 年 8 月 1 日スパンにて]。ハミド・トゥアはマラヤの独立前後から土地なし農民のための運動を始め、1997 年に 77 歳で死去するまでに何度も国内治安法で逮捕され

編集部の姿勢に業を煮やした UMNO は後にトレンガヌ州首相になるイブラヒム・フィクリ (Ibrahim Fikri)³⁰⁾ を経営陣に送り込み、1961 年 7 月にザハリに次の 4 カ条の編集指針を指示した [Zahari 1989: 35; 2001: 74]。

- ① 与党を全面的に支持すること、なぜなら、これが商業的により多くの利益を生むからである。
- ② 事実関係で正確なニュースを出版すること。ただし、野党に関するニュースのヘッドラインは制限すること。
- ③ 連盟所属の全ての大臣についてのニュースは重要政策に関する声明も含め、どこで起こったことであっても大きなニュース・ヘッドラインの下でより多くのニュースを報道すること。
- ④ 既に行動がなされたときには連盟を支持し、間違った決定については建設的な批判をすること。

この 4 カ条の編集方針が『ウトゥサン・ムラユ』が創刊時に定めた「民族」「宗教」「故郷」のために働くとした誓いに反していると考えたザハリら編集部員たちは、総務、印刷、編集の 3 部門のスタッフを招集した委員会を緊急に組織してストライキも視野に入れながら 4 カ条の編集方針の撤回を経営陣に求めた。この要求に対してザハリにはシンガポールへの異動の命令が出された。異動命令を経営陣からの 4 カ条の編集方針の撤回の拒否であると受け取ったザハリらは 7 月 21 日からストライキに突入した。

ストライキは 10 月 21 日まで 3 カ月間も続き、独立後のマラヤ／マレーシアではジャーナリストが起こした唯一の本格的なストライキであった。このストライキでは、ジャーナリスト以外の印刷・植字関連の一般労働者や事務員もストライキに参加した。ストライキについて現在複数の解釈があるものの、社内に広がっていた自由で独立した言論への危機感が一般労働者や事務員を含むストライキ参加者の拡大につながったことは否定できない。³¹⁾

ながらも、運動を続けた。1967 年 8 月にはスランゴール州のテルックゴンで 530 名余りの農民とともに野菜を植えて開拓を行ったことが知られている [Hishamuddin and Mohd. Ridzuan 2009]。

30) イブラヒム・フィクリは『ウトゥサン・ムラユ』のストライキの終了後は会長として経営に携わるが、1961 年 11 月にはトレンガヌ州の州首相に就任して 1970 年までその地位にあった。

31) ザハリへのインタビュー。ストライキが発生し、それが一般労働者や事務員を巻き込んで長期化した理由について、オスマン [Othman 1989] が指摘するように社外の共産主義者の扇動によるものだとする見方もある。他にも、サファール・ハシム [Safar 1996: 248-249, 256] は、① 一般労働者や事務員たちを含めて社員たちが『ウトゥサン・ムラユ』が UMNO の傘下に入り、言論の自由が失われると、読者が離れて自分たちの職を失う可能性があると考えたため、② クアラルンプール本社での 115 名のストライキ参加者のうちの 9 割がシンガポール出身者で彼らがマレー半島出身者よりも戦闘的かつ急進的であったため、とする説明をしている。

ストライキの発生を受けて経営陣は本社を閉鎖して対抗した。ザハリらは本社の外にテントを張ってそこで寝起きして建物に入ろうとする人間を押しとどめた。とはいえ、『ウトゥサン・ムラク』はストライキ発生翌日の6月22日分を除けば発行が続けられた。経営側はストライキへの参加を拒んだジャーナリストを中心にシンガポール支社からも応援を呼んで本社の外で発行を続けたのである [Chamil 1989: 45]。

ザハリが記憶するように、経営側の対抗策にもかかわらず、ストライキ参加者は当初から強固な団結を維持し続けた。しかし、1カ月を過ぎるあたりからその勢いが削がれていくことになった。そのきっかけはザハリがストライキの指揮を取れなくなったことから始まった。ザハリはシンガポール支社でも同時に起こっていたストライキの指導のためにマラヤを一時出国したが、9月2日にマラヤに再入国しようとした時に政府から入国を拒否された。リーダーを失った本社のストライキ参加者の間では対立が表面化し、ストライキから離れるジャーナリストも現れ始め、10月21日に終焉を迎えた。『ウトゥサン・ムラク』を退職したサマッドも友人の伝手を使ってジャーナリストたちにストライキから離れるように勧めていたという [Zahari 2001: 75]。

ザハリは友人のジャーナリストたちの手記を使って、ストライキが単にウトゥサン・グループ内部の経営の問題に留まらず、ラーマン首相が直接的に対応に乗り出していた問題であることを記録している [ibid.: 76]。ザハリの入国禁止はラーマン首相がストライキ潰しを狙って実施した行為であり、独立運動を通じて名声と影響力を得た『ウトゥサン・ムラク』を自らの統制下に置こうとする新国家の意思をここに見て取ることができる。

お わ り に —— マレーシアにおけるメディア統制の起源

本稿ではこれまで戦前から1961年までの『ウトゥサン・ムラク』とそこに集まったジャーナリストに焦点を当て脱植民地期のジャーナリズムと政治権力との関係について議論を進めてきた。

第I章でみたように、1939年にマレー人のアイデンティティ確立や社会・経済的地位向上を支援する「エスニック・メディア」として設立された『ウトゥサン・ムラク』は、設立当初は政治権力を持つイギリス植民地政府や、イギリスの庇護の下で依然として権威を確保していたスルタンなど旧支配層のグループに表立った反対や批判を振り向けることなく、現状からの改善を要望する穏健なメディアの地位に留まっていた。

しかし、第II章から第III章でみたように、戦時中に日本のプロパガンダ紙となった『ブリタ・マライ』への改名を経て戦後に再建された『ウトゥサン・ムラク』において左派マレー・ナショナリズムの影響を受けたサマッドが事実上の編集長となると、独立に重要な影響を与え

る政治アクターとして再登場することとなった。戦後の 1940 年代における政治アクターとしての『ウトゥサン・ムラユ』の最も重要な貢献は、マラヤ連合案に反対するためにマレー人組織を糾合することを呼びかけ、UMNO を誕生させたことである。その一方で『ウトゥサン・ムラユ』はマラヤ独立に向けて時には UMNO に批判的な立場からジャーナリズムを展開し、UMNO に全面的に依拠することなく自立したアクターとして活動した。これが可能になったのは、『ウトゥサン・ムラユ』が戦前から続くマレー・ナショナリズムの旗手として名声を確立していたことと同時に、サマッドが「二重機能」と呼んだ政治権力の一端を担っていたジャーナリストの貢献が大きかった。サマッド本人は公式の政治的地位についてはないが、こうした「二重機能」を持つジャーナリストたちのネットワークを通して独立に向かうマラヤの政治に隠然たる影響力を持っていた。後からみれば、終戦からマラヤが独立する 1957 年までの時期こそが独立に関わる政治過程に大きな貢献を行い、現在のマレー語による言論活動の礎を築くようなジャーナリストや作家を多数生み出したという意味で『ウトゥサン・ムラユ』の「黄金時代」であったといえることができるかもしれない。³²⁾

しかし、第 IV 章でみたように独立期に「黄金時代」を迎えた『ウトゥサン・ムラユ』のジャーナリズムはその時代を支えたサマッドとユソフの 2 人が退社する中で政治権力からの圧力に抗しきれなくなっていく。特にサマッドの退社を引き起こしたのは、戦前からの名声を確立して「二重機能」を持つジャーナリストを抱える『ウトゥサン・ムラユ』と、サマッドとの結合を恐れるラーマンやリーら新国家の政治的指導者であったとみることができる。

『ウトゥサン・ムラユ』を離れたサマッドを迎え入れてその後の彼のジャーナリズム活動を支える場を提供したのが戦前からマレー・ナショナリストを中心に植民地勢力の手先ともみられてきたストレーツ・タイムズ・グループであったことは、時期によって異なった様相をみせる脱植民地期のジャーナリズムと政治権力の関係を理解するうえで格好の例としてみなすことができる。サマッドは『ウトゥサン・ムラユ』あるいはその後継紙の『ウトゥサン・マレーシア』の基礎を固めるとともに、その後のライバル紙となる『プリタ・ハリアン』を文字通り一から作り上げていくのに多大な貢献をしており、マレーシアにおける「マレー語ジャーナリズムの父」の称号はまさしく彼のためにある。

戦前から独立期にかけてのマレー・ナショナリズムの高まりの中で生まれた現地語メディアの『ウトゥサン・ムラユ』と現地人の政治組織の UMMO との関係はお互いに切り離して考えることはできない。オン・ジャアファルから UMNO を引き継いだラーマンは両者の関係を次

32) 本稿ではジャーナリズムが中心的テーマであったために触れなかったが、現代のマレー語文学の成立・発展にも『ウトゥサン・ムラユ』は大きな役割を果たしている。特に文学者集団の ASAS'50 の中心人物だった文学者のクリス・マス (Keris Mas) やウスマン・アワン (Usman Awang) らは『ウトゥサン・ムラユ』のジャーナリストとして最初のキャリアを積んだ。

のように述べている。

実のところ、もし、UMNO をマレー人の闘争と覚醒から切り離すことができないならば、『ウトゥサン・ムラユ』もまたそれらから切り離すことはできない。なぜなら、『ウトゥサン・ムラユ』によって提起されたものの成果から、この大いなる UMNO という組織が形成されたからである。もし、UMNO がマレー人最大の政治組織であるとするならば、ウトゥサンはマレー人の舌である。[Rahman 1979: 30]

この演説でラーマンはマレー・ナショナリズムを体現する組織として UMNO と『ウトゥサン・ムラユ』を同格であるように扱っているが、1957 年のマラヤ独立が確実となった時点で既にラーマンは『ウトゥサン・ムラユ』を「マレー人の舌」から「UMNO の舌」へと変える布石を打っていった。UMNO は 2 つの手法を駆使している。サマッドの左遷を強制するうえで使われた新聞の発行免許を通じた脅迫と、株式買収による所有権を通じての統制である。『ウトゥサン・ムラユ』の事例は UMNO がこれらの手法を合わせてメディア統制を始めた最初の事例であった。『ウトゥサン・ムラユ』の後にもマレーシアでは政府・与党が発行免許と所有権を通じたメディアの統制を進める事例がみられるようになる。³³⁾

ナショナリズムの理論と実際の事例が示すように、現地語ジャーナリズムが脱植民地化の過程に重要な役割を果たすことで政治的にも大きな名声と権威を獲得する場合は少なくない。しかし、そうして確立されたジャーナリズムの名声や権威が独立後には植民地宗主国から権力を引き継いだ現地人の政府に警戒感とそのメディアを統制下に置くことの利点を感じさせ、介入を引き起こすことにもなりうる。本稿が『ウトゥサン・ムラユ』の生み出されるジャーナリズムの現場に焦点を当てて行った検討からわかるように、政治権力の介入は、実際に起こった 1961 年のストライキのような決定的対立が表面化する以前から始まっていたのであり、サマッドとユソフの関係性にみられるような個々のジャーナリストの個性や人間関係がジャーナリズムと政治権力の関係性の展開に大きな影響を与えてきたのである。

本稿では検討材料となった『ウトゥサン・ムラユ』が体現していたマレー語ジャーナリズムが 1961 年のストライキの後にどのような形をとって現在につながっていくのかについては十分に言及することができなかった。この課題については別稿にゆずりたい。

33) その後の発行免許と所有権を通じたメディア統制の例として、NSTP グループへの介入については伊賀 [2012]、南洋商報の例については伊賀 [2010] を参照。

謝 辞

本稿で使用したジャウィ文字のマレー語資料をローマ字に翻訳するにあたって、アスマディ・ハッサン (Asmadi Hassan, マラヤ大学人文社会学部) 氏にお世話になった。感謝したい。

参 考 文 献

日本語文献

- 萩原宜之. 1996. 『現代アジアの肖像 14 ラーマンとマハティール —— プミプトラの挑戦』東京：岩波書店。
- 伊賀 司. 2010. 「マレーシアにおける華語紙をめぐる政治 —— MCA による『南洋商報』買収事件に注目して」『アジア・アフリカ地域研究』10(1): 35-66.
- . 2012. 「マレーシアにおける与党政治とメディア —— NSTP の企業再編とグループ編集長人事に注目して」『国際協力論集』19(2): 39-57.
- 岩崎育夫. 1996. 『現代アジアの肖像 15 リー・クアンユー —— 西洋とアジアのはざままで』東京：岩波書店。
- 金子芳樹. 2001. 『マレーシアの政治とエスニシティ —— 華人政治と国民統合』東京：晃洋書房。
- 李 相哲. 2006. 「植民地統治下の抵抗ジャーナリズム —— 戦前朝鮮半島における『民族紙』の系譜を辿る」『国際社会文化研究所紀要』8: 303-319.
- 町村敬志. 1994. 「エスニック・メディアの歴史的変容 —— 国民国家とマイノリティの二〇世紀」『社会学評論』44(4): 416-429.
- 長井信一. 1978. 『現代マレーシア政治研究』東京：アジア経済研究所。
- 白水繁彦. 2004. 『エスニック・メディア研究』東京：明石書店。
- 左右田直規. 2006. 「ガファールに見る UMNO 史の一側面」『JAMS News』35: 48-50.
- 山本博之. 2006. 『脱植民地化とナショナリズム —— 英領北ボルネオにおける民族形成』東京：東京大学出版会。

外国語文献

- Abbott, Jason P. 2011. Electoral Authoritarianism and the Print Media in Malaysia: Measuring Political Bias and Analyzing Its Cause. *Asian Affairs* 38(1): 1-38.
- Abdullah Ahmad. 1985. *Tungku Abdul Rahman and Malaysia's Foreign Policy 1963-1970*. Kuala Lumpur: Berita Publications.
- Ahmad Sebi. 2000. Samad's Influence. In *A. Samad Ismail: Journalism and Politics*, edited by Cheah Boon Kheng, pp. 123-158. Kuala Lumpur: Utusan Publications & Distributions Sdn Bhd.
- Ainon Haji Kuntom. 1974. Leading the Path to Freedom. *Leader: Malaysian Journalism Review* 3(1): 39-41.
- Ali Salim. 2000. A Pioneer in Malay Journalism. In *A. Samad Ismail: Journalism and Politics*, edited by Cheah Boon Kheng, pp. 81-101. Kuala Lumpur: Utusan Publications & Distributions Sdn Bhd.
- Anderson, Benedict. 1983. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. London: Verso.
- Ariffin Omar. 2015. *Bangsa Melayu: Malay Concept of Democracy and Community 1945-1950*. 2nd ed. London: Oxford University Press.
- Aziz Ishak, Abdul. 1977. *Special Guest: The Detention in Malaysia of an Ex-Cabinet Minister*. Singapore: Oxford University Press.
- Bernamea. 2006. Utusan Melayu Newspaper to Be Published Again. 6 March. <http://www.bernama.com/bernama/v3/printable.php?id=184151> (2016年8月17日確認)。
- Chamil Wariya. 1989. Dua Perspektif Mogok Utusan. In *Di Sebalik Jendela Utusan: Suara Karamat*, edited by Utusan Melayu (Malaysia) Berhad, pp. 43-47. Kuala Lumpur: Utusan Melayu (Malaysia) Berhad.
- Cheah Boon Kheng. 2000. Introduction. In *A. Samad Ismail: Journalism and Politics*, edited by Cheah Boon

- Kheng, pp. 1-15. Kuala Lumpur: Utusan Publications & Distributions Sdn Bhd.
- Chew, Melanie. 1999. *The Presidential Notes Volume 1: A Biography of President Yusof bin Ishak*. Singapore: SNP Publishing.
- Firdaus Haji Abdullah. 1985. *Radical Malay Politics: Its Origins and Early Development*. Petaling Jaya: Pelanduk Publications.
- Funston, N. John. 1980. *Malay Politics in Malaysia: A Study of the United Malays National Organization and Party Islam*. Petaling Jaya: Heinemann Education Books.
- Hamidah Hassan. 2000. A Consummate Actor. In A. Samad Ismail: *Journalism and Politics*, edited by Cheah Boon Kheng, pp. 16-41. Kuala Lumpur: Utusan Publications & Distributions Sdn Bhd.
- Hishamuddin Rais; and Mohd. Ridzuan. 2009. Student Activism, Then and Now. *New Straits Times*. 16 May.
- Jeniri Amir. 2005. Perjuangan Getir Wartawan Melayu. *Dewan Masyarakat* 43(11): 11-14.
- Khong Kim Hoong. 2003. *Merdeka! British Rule and the Struggle for Independence in Malaya 1945-1957*. Petaling Jaya: Strategic Information Research Development.
- Kong, Lester. 2013. What Drives Utusan's Controversial Stance. *Straits Times*. 2 June.
- Latif Abu Bakar, Abdul. 1984. *Abdul Rahim Kajai: Wartawan dan Sasterawan Melayu*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa Dan Pustaka and Kementerian Pelajaran Malaysia.
- . 1998. *Peranan Media Dalam Pilihan Raya Persekutuan*. Shah Alam: Penerbit Fajar Bakti.
- Lily Zubaidah Rahim. 2010. Daring Challenge the Status Quo: The Lateral Vision and Meandering Political Journey of Left Malay Nationalists from Singapura. In *Reading the Malay World*, edited by Rick Hosking, Susan Hosking, Noritah Omar, and Washima Che Dan, pp. 44-65. Kent Town: Wakefield Press.
- Marina Samad. 1972. Early Malay Journalism: Jawi Peranakan and the First Malay Newspapers. *Leader: Malaysian Journalism Review* 1(1): 18-22.
- Mohamed Salleh Lamry. 2006. *Gerakan Kiri Melayu dalam Perjuangan Kemerdekaan*. Bangi: Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia.
- Mohammad Yunos Hamidi. 1961. *Sejarah Pergerakan Politik Melayu Semenanjung*. Kuala Lumpur: Pustaka Antara.
- Mustafa K. Anuar. 2002. Defining Democratic Discourses: The Mainstream Press. In *Democracy in Malaysia: Discourses and Practice*, edited by Francis Loh Kok Wah and Khoo Boo Teik, pp. 138-164. Richmond: Curzon Press.
- Ongkili, James P. 1985. *Nation-building in Malaysia 1946-1974*. Singapore: Oxford University Press.
- Othman Wok. 1989. Bila Yusof Marah Utusan Melayu Senyap Sunyi. In *Di Sebalik Jendela Utusan: Suara Karamat*, edited by Utusan Melayu (Malaysia) Berhad, pp. 55-60. Kuala Lumpur: Utusan Melayu (Malaysia) Berhad.
- Rahman, Tunku Abdul. 1979. Peranan Utusan Melayu Bukan Perkiauman Tetapi Membela Golongan Majoriti di Negaranya. In *40 Tahun Utusan Melayu*, edited by Utusan Melayu (Malaysia) Berhad, pp. 28-31. Kuala Lumpur: Utusan Melayu (Malaysia) Berhad.
- Ramlah Adam. 2004. *Gerakan Radikalisme di Malaysia, 1938-1965*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- Roff, William R. 1994. *The Origin of Malay Nationalism*. 2nd ed. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Safar Hasim, Mohd. 1996. *Akhbar dan Kuasa: Perkembangan Sistem Akhbar di Malaysia Sejak 1806*. Kuala Lumpur: Penerbit Universiti Malaya.
- Samad Ismail, A. 1989. Suara Keramat Membawa Tradisi Baru. In *Di Sebalik Jendela Utusan: Suara Karamat*, edited by Utusan Melayu (Malaysia) Berhad, pp. 61-68. Kuala Lumpur: Utusan Melayu (Malaysia) Berhad.
- . 1993. *Memoir A. Samad Ismail di Singapura*. Bangi: Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia.
- Sani, Rustam A. 2008. *Social Roots of the Malay Left: An Analysis of the Kesatuan Melayu Muda*. Petaling Jaya: SIRD.
- Stockwell, A. J. 1979. *British Policy and Malay Politics during the Malayan Union Experiment 1942-1948*. Kuala Lumpur: Art Printing Works.

- Syed Hussin Ali. 2000. A Genuine Nationalist. In A. *Samad Ismail: Journalism and Politics*, edited by Cheah Boon Kheng, pp. 73-80. Kuala Lumpur: Utusan Publications & Distributions Sdn Bhd.
- Syed Muhd Khairudin Aljunied. 2009. *Colonialism, Violence and Muslims in Southeast Asia: The Maria Hertogh Controversy and Its Aftermath*. New York: Routledge.
- . 2015. *Radicals: Resistance and Protest in Colonial Malaya*. DeKalb: Northern Illinois University Press.
- Usmang Awang. 2000. Leader of Malay Literary Movement. In A. *Samad Ismail: Journalism and Politics*, edited by Cheah Boon Kheng, pp. 46-53. Kuala Lumpur: Utusan Publications & Distributions Sdn Bhd.
- Utusan Melayu. 1949. *Utusan Melayu 10 Tahun*. Singapore: Utusan Melayu.
- . 1979. *40 Tahun Utusan Melayu*. Kuala Lumpur: Utusan Melayu (Malaysia) Berhad.
- . 1989. *Di Sebalik Jendela Utusan: Suara Karamat*. Kuala Lumpur: Utusan Melayu (Malaysia) Berhad.
- Zahari, Said. 1989. Mogok Utusan: Megapa Dan Untuk Apa. In *Di Sebalik Jendela Utusan: Suara Karamat*, edited by Utusan Melayu (Malaysia) Berhad, pp. 30-35. Kuala Lumpur: Utusan Melayu (Malaysia) Berhad.
- . 2001. *Dark Clouds at Dawn: A Political Memoir*. Kuala Lumpur: INSAN.
- . 2006. *Dalam Ribuan Mimpi Gelisah: Memoir Said Zahari*. Kuala Lumpur: Utusan Publications.
- . 2015. *Suara Bicara: Fragmen Memoir Said Zahari*. Kuala Lumpur: PSR; Petaling Jaya: SIRD.
- Zaharom Nain. 2002. The Structure of the Media Industry. In *Democracy in Malaysia: Discourses and Practice*, edited by Francis Loh Kok Wah and Khoo Boo Teik, pp. 111-137. Richmond: Curzon Press.
- Zaharom Nain; and Wang Lay Kim. 2004. Ownership, Control and the Malaysian Media. In *Who Owns the Media: Global Trends and Local Resistance*, edited by Pradip N. Thomas and Zaharom Nain, pp. 249-267. London and New York: Zed Books.
- Zainal-Abidin B. Ahmad. 1941. Malay Journalism in Malaya. *Journal of Malayan Branch* 14(2): 244-250.

新聞

Utusan Melayu

インタビュー（すべてインタビュー当時の肩書）

Hatta Wahari（National Union of Journalist 代表），2011年2月28日，クアラルンプール。

Masjaliza Hamzah（Center for Independent Journalism 代表），2013年3月13日，クアラルンプール。

Said Zahari（『ウトウサン・ムラユ』元編集長），2009年8月1日，スパン。

Steven Gan（『マレーシアキニ』(*Malaysiakini*) 編集長），2011年2月16日，クアラルンプール。

(2016年12月2日 掲載決定)